慶應義塾大学学術情報リポジトリ

Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	天理大学附属天理図書館蔵『よひの雨』『立聞』翻刻
Sub Title	
Author	石川, 透(Ishikawa, Toru)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication	1989
year	
Jtitle	三田國文 No.11 (1989. 6) ,p.55- 60
JaLC DOI	10.14991/002.19890600-0055
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara _id=AN00296083-19890600-0055

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

石 Щ 透

例

一、本翻刻は、天理大理図書館蔵『よひの雨』『立聞』である。本 にその書誌については、本誌第八号・第九号を参照していただき 本に収められている。『落窪物語抄』に収められた作品群、並び 二作品は、国籍類書のうち、目録題を『落窪物語抄』とする一冊

一、本二作品は、従来『十番の物あらそひ』として知られていた室 町時代物語の異本である。本二作品を含む『十番の物あらそひ』 の書誌上の問題、並びに諸伝本の性格については、拙稿「『十番 の物あらそひ』の諸伝本」(『汲古』第十六号)を参照していただ

一、翻刻に際しては、底本のおもかげを残すように努めたが、漢字 区分し、私に句読点を多く施した他、()をもってママを示し ・異体字はおおむね現行書体に改めた。また、段落は原本通りに

一、最後に、 翻刻掲載の御許可を賜わった天理大学附属天理図書館

に厚く御礼申し上げたい。(天曜大天理図書館本翻刻第四九四号)

よひの雨(内題)

りかはしく、いつれによるへきふしもみえねは、左右にわかちて、 あらん様をとて、心く~にねかひて書付ぬるに、夏ひきのいとみた きならねとも、うときも人のとはひけんも、ことはりにおもひしら やふしわかねは、春の日かけは八重葎、しけれるかとに もさし 入 しかまにそむるかちまけを定へしとそ。 たらひたる人の、すへて有へき世ならねは、たゝ一かとも思ふすち ほしきさまをいひあへるに、みるめよりはしめ、心まて思ふさまに ほと、つれく
慰めかたきま」、各物をもいひかはす人の、あらま るゝ比になん、此夕より降つる雨猶やます、いとしめやかなる宵の り、峯の嵐長閉にて、軒端の梅うちにおひたる躰、たれととはるへ て、古巣をいつる鶯のこゑ、たゝこしもとちかき谷の戸に さえつ

一番

しなにもよらしみるめもいわし、心つかひゆへありて、きやしやに

おほえ、月花紅葉の折くく、哀なる夕かなしきあしたのそらにもな やさしく、何となくしいてん事もをよはぬきはに、あらきやしやと は、すくれておほゆへし。 なして、ことすくなにのこりおほく、いへはえに心ふかけならん人

さけすくさす、こすみらす墨書なかしたる水くきの跡まち見て、み

見ん時は、我もこゝろつかひせられ、いかにせんとおほえん人そ、 なれ木のいたくみなれはせし、いりぬるいその草まて、玉さかに待

おもしろかるへき。

をらは落ぬへき萩の上の露、ひろはゝ消なんとするたまさゝの上の

とちきらはや。 **うつくしく、霞のうちのかはさくらをみる心ちせん人に、千代萬代** すちはをくれたりとも、松山の波こさゝ覧人のみる目あかぬ事なく あられは、心をかれてたのもしけなし。たゝ情のかたきやしやなる

内の花なさけをくれんこそ、桜のなをりねんなき心せめ。 左月雪、右あけほの、とりくくにていつれと定かたけれと、霞の

わつらはしく心とりにくけなるはうるさし。何事もやすくくとし て、くちをしく物いひはなやかに、にきはゝしき人そよかるへき。

こそ、わりなきこゝちせめ。 隙をまつほと、うちぬる夜なくて、心つくしの忍ふ山にまよはん程 なん。そのうちに心とまりておほえん人の、ぬしつよくせきもりの 其人獨をさためてはむつかし。たゝ時にしたかひて、とも角もあり 忍ふ山にまよはんは、まことおもしろかるへし。

みるめはいつくもわろきによれるを、おくゆかしくしめやかにもて

ひく手餘多なりとも、われをつゐのよるせにして、いとふ心なく 左耳心ふかけならん人もむつかし。たゝみるめたににくからすは、

は、浮もつらきも忘られておほゆへし。 左勝へきにや。

四番 左持 やすく、外ゆくなみの心なからん人は、うちとけられぬへき。 ふりも見るめもおもふやうになくとも、心つかひしとく\敷うしろ

みかちに、しやうとくおもしろきけしたる人そよき。 左はうちとけ過、右はこにくけしたり。如何様勝まけ定難し。

顔みるめはいかさまにもあれ、ふりきやしやに上すめきて、色この

五番 左持

の、あこきか浦のためしひきいて、あちきなくしからみつよからん ぬしつよき人を心つくしの床の山にて、 夢のまくらをむ す ほと、あさきせならて、我かたふかくなりまさらんそ、面白かるへ

人にとかめられすして、色ある落葉をひろはゝや。

とや申へき。 床の山に引かへ、落葉を御ねひ候哉。されとも、勝まけおなし程

同しなみならん人はめつらしけなし。月のうちのかつらを、およは 六番 左持

-- 56

ぬ枝なりとも、雲にかけはしわたしえて、たくひなきひかりを袖に

うつして見はや。

一夜なりとも此世の外迄の

思出よ。

およはぬ枝は手折らんもてつゝなり。かけの下草とて、およひくた

されんも心持あし。たゝをなし程の人にいつもそひたくもなし。又

±±のさ衣まとほならむも、しほれかちなるへし。吹かふかせもちあま かき程にて、心もとなからぬ程にいひかわさはや。

おもひてなるへし。右の下葉も理りしられて、是も 持とそ 申へ 左雲井迄おもひあかりて、類なき月の光に袖をかわさん程、誠に

七番

人のむすはて、またうらわかき初草もかなり

海士のかるもにすむ虫の名をかこちなとして、恨とをさす別をしら むへき事をもにくからぬ程にうちかすめ、人のすへこすなみをも、 森の下草老ぬとも、代なれたらん人の奥ふかくかとありて、うらや

左は在中将のむすはんことをうれへけん初草も類なし。又代なれ たる人の森のかけゆかしくおほゆれは、此草あはせもいつれと申

てあらはや

うちにまよひて、

年月ふるともうへはつれなくて、

には鳥の下にか 瀬々のむもれ木顕れて後は、 よふと人しられし あひみえ見ても又あふよまれなる夢の

いつもそはゝや。時~~そへは夢の世やた

もしろくおほえんを、同し所にへたてなくて、明るも暮るもしらす 花かたみめならぬ人あまたあらん程、いつとなくめうつりして、 れおもしろや。 あふよ稀なる夢のうちに、浮身をさめぬ代かたりも、

* 右

して、いつとなく御さかつきうちおかて、こうたましりにあそは♪

れておほゆれと、さしあたりめうつりせん。光源氏のやうに色好みならん人に、紫のうへの御覚のやうに、すく

をなし江のたなゝし小ふねはこゝろとめし。たゝいつとなくよせて 十番 左

うにもあれる

きはや。 何とおもひ定むへき心持もせす、たゝ此事ともを人比~~しりてす よせては帰る浮舟うかく~しくや。右残なき御ねかひよしあしは

しらねと、有て世中はてのうけれは、しりて過はやはけに面白く

けても、七ちらの木かけおもひやられて、むらさきの雲のむかへを 扨も降くらす雨のをと、そらにきこゆるかくのこゑ、袖に吹風につ

に、めさめて是もほんのふそくほたひにて、我願におほしめすまゝ

は帰るうき舟に、月なみにひとり~~とりかへはや。ぬしは何とや まち得て帰るに、此御ねかひともにしゆす打をき、筆とりむかひ候 **—** 57 **—**

うてなの縁を結ひ、同し菩提心をおこしなから、佛の道に入なんとひ、風におつる萩の露も蓮の上の玉とみかき、此しゆと友にひとつの後は、また松山の波もたかしの池隔なく、くこう御ちきりありて、只今の勝まけも筆のけちえんによりて、御いのち

立 聞(内題)

る。 ゝし給ふを、うちにはいかておもひよるへき、打とけ物 語 し 侍 けゝし給ふを、うちにはいかておもひよるへき、打とけ物 語 し 侍 け若き女餘多すむあたりに、いとすき心ある男、つねはかひま見立き

りて、よくさきこほれたる藤の花の松に咲かゝりて、かたはらになりて、よくさきこほれたる藤の花の松に咲かゝりて、かたはらになすかた、今少におひくはかりて、御もてなしけはひ心にくゝよしあすかた、今少におひくはかりて、御もてなしけはひ心にくゝよしあすかた、今少におひくはかりて、御もてなしけはひ心にくゝよしありて、よくさきこほれたる藤の花の松に咲かゝりて、然間にも乱をなった。今少におひくはかりて、御もてなしけはひ心にくゝよしありて、よくさきこほれたる藤の花の松に咲かゝりて、かかひなしたるひはのはちおと、めつらしうきこゆるに、女正の宮は、二月計の青柳わつかにしたりはしめて、鶯の羽風にも乱るへき風情にて、琴ひき給ふに、女御宮をなしやうなる御なまめきすかた、今少におひくはかりて、御もてなしけはひ心にくゝよしありて、よくさきこほれたる藤の花の松に咲かゝりて、かたはらになった。

らましといへは、

きかはやといふ。もひやられて、をの了くおもしろう珍敷御あそひを、かたはらにてもひやられて、をの了くおもしろう珍敷御あそひを、かたはらにてきこゆるに、又大将の御子公達の吹合せ給ふ笛の音、をいさきもお

は、、又すこしあされはみたる声にて、それをかしらもあらんといへよけなる出入を見たらんは、いかに嬉敷もをかしらもあらんといへは侍らん。女御后も中~~心苦し。関白の北の方なとゝいはれて、は今ん事なき人にもてなさせて、男をはとり~~に殿上せさせて、きゃん事なき人にもてなさせて、男をはとり~~に殿上せさせて、されのよびなる出入を見たらんは、いかに嬉敷もをかしうもあらんといへよけなる出入を見たらんは、いかに嬉敷もをかしうもあらんといへよけなる出入を見たらんは、いかに嬉敷もをかしらもあらんといへまけなる出入を見たらんは、いかに嬉敷もをかしらもあらんといへまけなる出入を見ている。

たまさかにまち見たらん心持は、いかにめつらしうあかず哀にもあし、ふけゆくかねにうらみ、まつ夜なからの月をかこちなとして、し、ふけゆくかねにうらみ、まつ夜なからの月をかこちなとして、たる所にすへをかれ、しつかなる春の曙、淋しき秋の夕には、雲吹たる所にすへをかれ、しつかなる春の曙、淋しき秋の夕には、雲吹ひ傳へしやうに、かたちなまめいたる男におもはれて、少都はなれひ傳へしやうに、かたちなまめいたる男におもはれて、少都はなれて、りしろなる人、それは餘に作り付たらんすくせのやうにて、聊四、うしろなる人、それは餘に作り付たらんすくせのやうにて、聊

つらんと、ことさらによしはみ、かみの香なともなへてならぬを、日、あかしかねたる秋のよは、有明のそらにもあながちに忍ひかきりをもみせ、又身つからもうちしきらんおりは、物こしなとのけわりをもみせ、又身つからもうちしきらんおりは、物こしなとのけわつれなくのみもてなして、さすかに情なからす、おり~~は一くたつれなくのみもてなして、さすかに情なからす、おり~~は一くたのたるかとのなる。ことさらによしはみ、かみの香なともなへてならぬを、五、又居たる人、あひえたる中のちきりは、中~~うしろめたき折五、又居たる人、あひえたる中のちきりは、中~~うしろめたき折

らふ花なきやうにて、さうの御琴ひき給ふ。あはれにすみのほりて

に、ちいさきわらわなとしてさし出たらんを、ひきときて見は、なうちしめりたる花のまくらとつゆもをとさて、また朝ほら けの 程

けき侘ねぬ夜の月になと、さま~~書つくしたるふみの数つもりた

六、又かたはらより、それは餘にこは~~しうねちけたるわさ成へらんは、をかしう心あわれにもあらんかしといふ。

ま、それかありか移りか香、かれかありさまなと、さま!~おもひに別、かふふりのひたひ、くつのをと、狩衣の袖、さし ぬ き の つし。女のおもひてに、たかきみしかきをしなへて、夕になれあした

E、十予り真だ斤枚て、定り川頭の引もなし、分はと司(誰を高、或時は大原高根嵯峨の山、伏見深草木幡山、かちにてゆかん宇治のとろへなは、伊勢尾のあまに身をやつし、あり家定すうかれいて、とのへて、しのたの森の千枝のはの数をつくし、顔かたちすこしおま、それかありか移りか香、かれかありさまなと、さま/~おもひま、それかありか移りが

末の明石舄、舟さしとめん炎洛鳥、こゝろ筑紫の文字の関、ひれを彼行平の中納言、藁塩たれにし須磨の浦、光源氏の大将の、旅ねの里、片野の真柴折敷て、淀の川瀬の月もみん、今はた同し難波潟、

鳥、住吉泊瀬よしの山、花の古江わけて見ん、さひしさをあすかのる山や松浦潟、我身こそ年は老ぬれ若のうら、塩のさし 出 の 濱 千床の明石潟、舟さしとめん淡路嶋、こゝろ筑紫の文字の関、ひれふ

寺のかねきかん、白なみの名もおそろしや立田山、にしきおりかへ

むかしのことをおもひ出て、幾手餘多の二見かた、かの斎

うち出のはま、彼貫之かえひしけん、むかしなからの山桜、植しこ勢の濱荻がる~~と、相坂山関の岩かとふみならし、志賀のから崎宮の御母息所、振すてゝと読給ひけん、鈴鹿川をもうちわたり、伊宮の御のはこ

おも~~しう、さるへき人にみえしなからのそのまゝに、外行事な七、又ある人、餘それはうきた覧様に侍れは、我かたゝしなたかくに、

に、まても、

命あらんかきり、

詠ありき侍らはおもしろかるへしといふ

もとにて日を送り、夏は泉にのそみ、凉しき風木の下やみの螢をあ九、あな心苦し。我はたゝ人にもみえし。代々にすまは、春は花のね、枕より又しらせしとおもふこそ、哀も浅からねといふに、にはかなき中にて、命もたゆる迄恋侘て、袖のしからみ つゝみ か吹につけつゝ松嶋になとをとろかし、女三の宮の煙くらへなとさまにまよはんこそおもしろがらめ、騙月夜の内侍のかみ、木からしの

いはし、釣する蜑の翁なりとも、萬の寶にあきみちて、思ふ事なく十、又かたはらより、それは餘物さひしや。しなにもよらし形ちもとなくあらはやといふに、めいし、嵐にたくへて琴をしらへ、たつ波吹風に哥をよみ、たゝ何われみ、秋は田表の鴈、野辺の松虫を友として、月をあふきて夜を

ふこそはかなけれ。電光朝露の陰のうちに、何かあり果んと侍、かにしてたすからんとはねかひたまはて、たゝ現ともなき事をの給十一、又おくのかたより打なきたる声にて、五障三従の此身を、い

あらん外のおもひ出や有へきと云に、

しはしもみえぬ世をはなけかで

風さはく小篠か上の玉あられ

といふ。そはにあてなるあま君なん、あなそゝし。かくまておほし

の山、立し煙もいまははや、たえてそやみし陸奥の、忍ふの里の果

なをはるくくとわけゆかん、扱も猶おもひそ出る富士

ふはのせき、清見か崎田子の浦、うち出て見ん駿河なる、宇津の山

みの」中山なかくへに、あれぬとき」し

とも今は甲斐そなき鏡山、

辺の蔦の道、

-- 59 --

と云に、皆物もいはす成ぬめり。

誰ためにかは世をもいとはん

誰ためにかは世をもいとはん

Ĵ